

# 京都市帝國大學經濟學會

# 經濟論叢

第十二卷 第三號

大正十四年三月一日發行

## 論叢

御家人の特質……………文學博士 三浦周行

課税に於ける家族事情の考慮……………法學博士 神戸正雄

フッサールの現象學……………文學博士 米田庄太郎

日銀物價指數の研究……………法學士 汐見三郎

## 時論

支那の共和政治の成立<sup>及び</sup>建設……………文學博士 矢野仁一

小作問題と朝鮮の小作制……………法學博士 河田嗣郎

## 說苑

英國經濟學發展の一大觀……………法學博士 財部靜治

## 雜錄

佛蘭西財政狀態と相續税……………經濟學士 小川福太郎

海運同盟の<sup>研究に關する</sup>參考資料<sup>について</sup>……………法學士 小島昌太郎

說苑

英國經濟學發展の一大觀

財部 靜治

目次  
序言

- 一 經濟學者及史家が經濟史に寄せたる興味
- 二 社會哲學の一部門としての經濟學、及歴史講義
- 三 經驗的研究の代りとするに適應する社會哲學
- 四 目前の事實研究の目的上歴史を重んずべきことの承認
- 五 活氣を盛返せる經濟現象研究

W. Cunningham, *The Progress of Capitalism in England*, 1916 は經濟史の研究により、時事問題の解決に資するもの多しとするの見地より、説かれし英國經濟史概説なり、而も亦その所説によるに、「經濟活動の諸部面、假令ば海運、又は農業、又は特殊の地方につきては、由來夥しき歴

史ありしも、諸經濟活動交互關聯の發達、全體としての經濟體の發達を、概覽することは割合に  
進歩せざりき、素よりかゝる研究には多くの困難を伴ふべし、即ち作用を及ぼすべき數多の諸事  
由は、之を一の政治的共同體又は他の政治的共同體の、政治史により授けらるゝ編次より之を引  
離さんか、あらゆる脈絡を失ふに似たり、されど純經濟的概念にして、複雑なる經濟發展に於け  
る一絲に、吾人の注意を集中せしめ得べきものあり、即ち資本は史的一範疇として説かれ、又資  
本が完全なる優勢を占むるに至れるは、輓近の特色ある一事相なり、かくて吾人の注意を資本を  
解せざりし當時の産業狀態、資本の形成を可能ならしめたる諸事情、並に原始的諸組織及諸施設  
を破碎したる、一因子としての資本の效力に集中せんか、政治の目的上重要な諸危機に重きを  
おくことなくして、尙克く經濟界に於ける大變化の痕を釋ね、割合に重要な遺風に注意を注ぎ  
得べきを、發見せん」とするの主意により、書名としても經濟史と題せずして、前記の如き題目  
は附せられたり、吾人は同書第一章中氏が經濟史家としての觀點より、英國經濟學の發展に就き  
評論を試みたるもの、頗る簡單なりと雖も、その専門の大家ならではか計り説き出され得べきに  
非ずと、想ひ當れる節も存すと考ふる儘、以下之を譯載することとせり。

一、經濟學者も史家も俱に、時ありては經濟史に近寄れり。されど彼等は特にその興味を注げ  
る、研究事項に對し従たりとする以上に、之を重く考へしことなく、又その重要を適當に認むる

ことなかりき。

經濟學はその存立の當初より、經濟史を下女の資格によりて歡迎したり、即ち經濟學は普通に一の經驗的學問視せられ、又經濟學者が主として準據せる所は、當然その當時に於ける事蹟に存したるに拘はらず、進みて又記録されたる過去の經驗をも引きたり、McCulloch, Principles, p. 21 も言へる如く、「經濟學者にしてその研究材料を、眞に洪大なる世相より汲取ることなからんか、富の生産、蓄積、分配及消費を律すべき、諸法則の眞知識に近きものには到達することなからん、經濟學者はあらゆる事情の下にある人を研究すべく、社會、藝術、商業及文明の歴史を參酌し、立法家、哲學者及旅行家の著書をも參酌すべし、略言すれば諸國民の進歩を促進し、又は阻止すべき諸原因を、明かならしめ得べき事々物々を參酌すべし、世界の諸地方及諸時代に於ける、人類の盛衰及諸事情につき、起れる諸變遷を特に注意すべく、産業の興隆、進歩及衰替の痕を繹ね、特に又種々の制度及規則に伴へる諸結果を、周密に解析し比較し、かくて進み行く一社會と、替れ行く一社會とが、かくその針路を背反せしむるに至りし、諸事情を識別することゝすべからり」。

Adam Smith の「諸國民の富」は、氏の頭腦が史實により飽充されたることを示す、又第十八世紀中經濟學の特殊部門に關する著書中には、Eden's State of the Poor 及 Anderson's Commerce の

如く、實質に富める著述により世を裨益し、その間現在の状態を理解せんとするの努力上、遠き過去の諸現象を夥しく引くの事實を示せるあり、Malthus' *Essay on Population* は幾多の地方及時代より引ける、博大の見聞を含む、Haileybury に於けるその後繼者たりし Richard Jones, *An Essay on the Distribution of Wealth and on the Sources of Taxation*, 1831 は、實際に支拂はるゝが如き地代の性質を、理解するの目的は、歸納法によりてのみ達せらるべきことを主張せり、Tooke 及 Thorold Rogers の史的研究は、特に物價の歴史に傾倒せられたり、物價に關する Fleetwood の論文 *Chronicon Preciosum*, 1745 は、その當世の一問題を取扱ひ、寺祿の價格に關する法的制限を解釋せるものなるも、後世研究者之を引ける際、興味を引ける中心點は、之により既往の事情を明かにし、昔の世に住める人々の習慣及資源に就き、その真相を一層明かにせんとする點に存せるの狀あり、Thorold Rogers 教授は特に政治史の經濟的解釋に没頭したり、かくて一國の經濟的發展それ自體に就き、系統的研究を施すの値ありと、考へたりとは想はれず。

(經濟學研究の目的上、現在及過去の相對的物價研究の重要なるは、Nicholson, *Principles*, III, 65 中判明にせらる)

第十九世紀に於ける史家は初期經濟學者同様、經濟史より汲取られ得べき新説を、悦びて歡迎したり、經濟に亘る細目は史乘に載するの、品位を値ひせずと考ふべき物々しき史家は、最早その勢力を振ふが如きことなきに至れり、政治上の諸事件を生める四圍の肝要事情を、説くべき特

別の數章は普通に加へらるゝに至り、俗世間向の著作者も亦由來戰史及政治史に、寄せられたる重味を白地に忌むに至り、經濟的事相並にその他の諸相に於ける、「國民の實生活」が研究題目たるべきことを渴望するに至れり、唯普通の讀者は國富の諸開發策に關する叙説よりも、寧ろ人物評論及政治の敘述に興味を惹く。

歴史の歸一に留意し、原人は何れの世何れの地方にても、自然との鬭争上同一問題に遭遇すべく、諸民族がその鬭争に當りて採用せる諸方法には、興味ある類例あることを認むる學者も起れり、即ち Sir Henry Maine, Village Community は弘く行渡れる一施設としての、村落共產制に對する注意を喚起し、英人により古く經歷されたる諸經驗は、他の諸民族によりても積まれたる、あることを注目して、多大の興味を惹けり、是等の事由に基づき、經濟史の歴史に對する縁は、經濟學に對する縁よりも一層深しと、普通に想はるゝに至り、その研究は現在の諸問題に關するよりも、過去に就きての術學を事とすと、想はるゝが如き方向に延ばされたり。

二、經濟史に對する右の疎遠なる態度は、經濟學を一の經驗科學視せずして、社會哲學（最近經濟學が當然の事として假定する社會哲學の、一般評論に就ては J. Hutchison Stirling, Secret of Hegel, II, 541 f. 參照）の最も新しき形態の簡單なる評論につきは Cunningham, Christianity and Economic Science, p. 90 參照）の一部門視する諸學者により、特に採用せられたり、かく考ふるの慣例開かれたるは、一は宗教の教師に由

來せり、即ち是等の徒は社會の規律上遵守さるべき諸原則が、神的經綸の諸原則たるべきことを感せり、假令ば President Weyland, Elements of Political Economy, 1837 p. 3. は學問を以て、「神が立定したる諸法則を、人間知識の一部門に於て啓明し得たる程度内にて、系統的に羅列せるものなりとし、此世にて幸福を重ねることに就きても、造物者が之を定まれる法則に則らしむることは、少しく省思すれば明白なり……故に經濟學は現綱紀の下、願望の目的物に對する人の諸關係が、個人的たる社會的たるを問はず、規律せらるゝの準則たるべき、諸法則の系統的羅列なり」とし、之に稍似たる一見解は、Dr. Chalmers, Christian and Civic Economy of Large Towns, 1821, III. p. 38. によりても懷かれたり、即ちそは「經濟學の諸法則と呼ばれべきものを、自然の諸法則に對する一補足」視したる點に於て然り。

同種の一刺戟は、人道の宗教及 Comte の社會哲學によりても援けられたり、Comte の諸著作物による影響は、Mill による「經濟學原理」の諸章中隨所に、その痕を尋ね得べし、Mill は經濟學を終始一經驗科學として取扱へりと雖も、(鏡弁小作者及折半小作者の取扱上、Mill は經驗的研究の大主張者たりし、Richard Jones により明かに影響されたり) 不斷の考量を求むべき、新哲學の諸要求をも意識したり、而してその著書名中には、社會哲學への經濟原理應用を多少含めることを明言し、Principles of Political Economy with some of their Applications to Social Philosophy を題したり、諸經濟學者

は外面の諸事情に、不當の重味をおき、かくて事實の複雑により惱まざるゝことに就き、通有の懸念あることを熟知したり、而も亦經驗科學の通論を重用せるは確かなり、實に分配の諸法則が、變り行く社會事情により、事實上左右さるべきことは承認されたり、されど生産の諸原理は、自然界の秩序に關する諸法則に見るが如き、威力を悉く備ふべしと想はれたり、經濟的諸法則を立定するとは、萬國の社會を通じ、沿ねく眞理とすべきものを編み、又文明の進歩に従ひ、益々眞實となるべきものを、説き出すの謂ひなりとせらるゝに至れり、かゝる思惟の慣例が益々安固なる地歩を占むるに至り、史的研究所の要度を殺がれたるに似たり、蓋し社會哲學にして萬國に眞理とすべきものを、立定すべしとせんが、容易に法則の支配内に組入れ兼ねべき、諸現象の研究は無用たり、歴史の價值は社會哲學により立定されたる諸原理の、例證のために引用するゝこと以上に、認められざるべきを以てなり。(八十年代に於ける經濟史の研究者は、かく縮限されたる任務が彼等の本分とせられたることに満足せざりき、忘れられたる論争に廻りて之を繰返すは、證なきことなれど、その當時 Cunningham & Economic Review, 1892 に載せたる論文 A Plea for Pure Theory 及 Economic Journal, 1892 並に Academy, 1892 に載せたる論文 Perversion of Economic History は、劍橋 Historical School と關係して、經濟的研究の自由を保全するの効果を奏したり、その時以後は經濟史の教科が、經濟的法則を例證せんとするの希望により、制せらるべしとの主張を試むる者なきに至れり。)



三、右の如く經濟學を社會哲學の一部門として取扱ふの新氣運は、過去の諸現象に關する經驗的研究に反せるのみならず、經濟學として從來諒解されたるものを、全く改作するの結果を伴へり、即ち經濟の學又は術の題目は、由來慣例上觀察され得べき外界現象に限られ、吾人の通論をその現象に照して驗めすこと、せるも、今や改作されたる經濟學は、動機及満足の内面的諸事情を、その題目として選び、舊經濟學者の諸主要概念も亦變更されたり、經濟學は最早人の性質を無視すとは、攻撃され兼ねること、なりぬ、唯人の性質に於ける諸殊異及諸變化につき、充分に承認する所なかりき、新經濟學者は交易の諸條件を、主題として考ふる代りに、效用の解析に専心したり、而してかゝる新しき叙説の仕方と、特殊問題を約説せる點とに、多少の長所を擧げたるも、諸經濟原理が眞理を穿たんとして、由來立脚したる根柢は覆へされたり、されどかゝる變革の試みが、無難に通用せんことは許されざりき、現に Ricardo により説かれたるが如き經濟學説が、日用の語法を無視し、日常生活の用をなす事跡きは承認されたる所なるも (McCulloch は多分 Ricardo に對する Jones's Distribution of Wealth の攻撃が、次の理由により看却せらるるとせし、評論の著者たりき)「Ricardo の著書は原理のみを取扱へるものたり、從ひて單純なる實際的標準により、判斷さるべきに非ることを、茲に注意すれば足れりとせん、……Ricardo がその起源及進歩を研究せんとしたる地代は、普通世上に地代と呼べるものに非ることは、Jones の他何れの學者にも考らす氏も熟知したり」(Edinburgh Review, LIV. 85) 社會哲學者は之を一缺陷たりとして承

認せざりき、經驗的研究を主張するために起りし抗議は、經濟學を社會哲學の一部門として、取扱へる諸學者よりせんか、Schmoller 及進める獨學逸派の人々の如く、「その自説を立つるに就き潜越又排他的」なる者の、單純なる好奇心として放擲されたり、(Keynes, *Scope and Method*, p. 26, 右の Schmoller 人物評は、確固に屬シ又は公平を得たりとなし兼ねるに似たり、兎に角一評論はその評論を主張せる人、偏狹なること又は有力ならざることを理由とし、必ずや之を無視すべしとすべきに非ず、Marshall, *Economic Journal*, II, 508, 1892 及 Pigou, *Morning Post*, 1 and 3 May, 1916 は此謬見に陥るるに似たり) されど英國の諸經濟學者に期待され得べきは、經濟學の領分として普通に許されたる諸學説を、數學的形式により示さんとせる一率先者の、豫言中に陳述されたる評論を、尠くとも酌量すべかりしことなり、即ち右の方面に於ける William Whewell (一七九四—一八六六年) の最初の試みは、古く一八二九年にあり、彼は言へり、「多くの人がこの企圖を以て、何等の實際的合理的結果を、必然生まざるべしと一先づ考ふるも、無理ならざるを予は知れり、現に若し數學的計算を以て、精神科學的推理に代らしめんとするの主意たり、かくて代數的符號の使用により、他の仕方にて達し得べきものと、その性質を異にすべき諸結果を、舉げ得べきこと主張されたりとせんか、右の意見は疑もなく眞理たらん、されど今予の數學應用に就ては、何等かゝる見解を以てするものにあらず、予は望む以下頁を重ねる間に、經濟學原理の一部分が、一層よく系統あり聯絡ある形式により、示さるゝの觀あらしめんこ

とを、併せて又附言せんと欲す、數學的用語を使用せるため、かゝる助用を以てせざる場合に比し一層簡單明瞭に、示さるゝの觀あらしめんことを望む」と、而も亦「予の分としては Ricardo による系統論の、基礎をなせる諸原理が、その作用上不動又普遍的たりと主張し、又はその原理の力が最上又優勢たり、之を制肘し之に反對すべきしかじかの諸原理は、之と比較して無視され得べしと主張することを、苟くも正しとは想はず、その諸原理の一部は一般に全く誤謬たり、他の一部は特殊事例の殆んど全部につき、適用し兼ねるに似たり」とせり、(Papers before the Cambridge Philosophical Society, March 2, 1829, p. 2, and April 18, 1831, p. 2.)その後二十年にして氏は草したり、「經濟學に於ける數學應用により、諸基本原理の確實に、何物かを加へ得べしと推測するときは、かゝる應用の諸結果に關し、甚だしき謬見を探ることゝならん、素より一部の人々間には、一題目に數學的形態を粧はしめんか、ためにその題目は數學的證明の資格を帯ぶるに至り、又假定されたる知識の原理に、數學を應用することにより、一科學とすべきもの幾分か創設さると、信するの癖なしとせず、されど予は此種のあらゆる口實を、排斥することを陳情するの外なし、本論の如き試み上なすの要ある如く、之により諸基本原理を明晰に説くことにより、他の仕方にてなされ得べきよりも、一層明白に認知及吟味を遂げ得べきことゝなる、されど原理の證據に何物をも加ふることなし、……」云 (Ibid. April 15, 1830)。

彼は主張せり、「數學は數量の論理なり、されば數量を以て取扱ふべき題目とし、演繹的推理を以てその使用方法とすべき一切の學問上、早晚その用具たるに至らんことは必然なり、されど經濟學がかゝる科學的性質を具有すとするの主張は、今尙全く支持さるゝを得ず、現在この學問を數學の一部門たらしめんと試むるも、そは諸事實の不問又は曲解に陥らしめ、又些々たる思索、無效果なる區別及無益なる言葉争の、一課程に陥るのみなるべし」と (Ibid. April 18, 1831, p. 43) Whewell は經濟原理の真理に於ける、經驗的性質に就き之を明解せり、かくて觀察に立脚せず、宗教的又は倫理的根據に就き重味を有し、又富につきて單純なる經驗的通論以上に、卓越せる確實性を有するものの如く、説き出さるゝ諸原理に立脚すべき、社會哲學の一部門として、經濟學を取扱ふことには、Schmoller と同様の程度に不審を懷けるに似たり。

Whewell は一八六六年に死せるにより、八十年代の經濟學者にとりては、氏の抗論に應酬するの勞を採るよりも、氏を無視する方一層簡單なりき、而して氏に倣ひ經濟學說の數學的取扱を繼承せる諸學者は、氏の警告を抛てる點に於て賢明たらざりき、夫れ觀察されたる事實の基礎に立脚せざる諸原理は、諸現象の精確なる知識を授くるものとして、信賴され得べきに非ず、又實際上の指針として之に依頼するを得ず、Edgeworth 教授説けるが如く、「經濟學に於ける抽象的真理の大多數は、手始めの適真に外ならずと想はるべく、實際界のためには別に具體的諸事情によ

り、補はるゝの要あり」(Economic Journal, xxvii. 225.) 而して經濟史は恰もかゝる具體的諸事情、並に現存諸狀態の起原に關する研究たり、諸實際問題を凡てその複雑なる儘に取扱ふためには、處及時に於ける諸特別事情を酌量するの要あり、經濟學が社會哲學の一部門として取扱はれんか、外界諸現象を取扱ふことなきに至り、その代り現代心の働きと、精確なる觀察又は周到なる檢校に適せざる、諸主觀的動機の自由發動とに關する學理とならん、現代心の働きに關する諸叙説は、その形態上極めて一般的たり得べく、此世の人々には適用なし、假りに土星の住民にして、その心性第十九世紀に於ける英人の心性と同じきものとせば、その住民にこそ適用あれとすべからん、吾人は英國に於て又この旬年に於て、社會又は個人の最終發展を遂げたりと、假定すべき何等の權利を有せず、實に第十九世紀式の心は、尙吾人の間に殘存すとすべきに拘はらず、前世紀八十年代及九十年代の社會哲學は、一の時代錯誤たりと考ふべき多少の理由あり、社會哲學者は今や諸新事實を舊公式に當嵌めんと、試むるの難關に處す、即ち彼等は戰爭により呈露されたる諸問題に關し、明解を與へ得ざりき、蓋し彼等は戰爭を以て一の單純なる反則視し、その間經濟學の諸法則はその適用を止めたりとなせばなり、生存の諸事實は極めて複雑なり、特殊事例の諸事情に就き、要點を見分くるためには、鍛鍊されたる判斷の要あり、夫れ諸大問題は戰爭による物質消失のため、又戰爭終結の際に必要を告げんとする急整理に關して起されたり、(Prof. C.

Kirkaldy's *Industrial Credit of the War*, Ch. v. 中に於ける「戦後經濟問題に關する Cunningham の論文參照」主要の問題は租税問題、及 Adam Smith による平等原則の正當適用問題にありと想ふは、戦費問題を取扱ふに不適切なる仕方なり、租税の理論は重要なものも、戦後に於ける國運復興に關し、國家として採用すべき最賢明の方針を論ずるの、手段を授くることなし、Lord Acton も言へる如く、「理論の最悪用は人をして事實に無感覺たらしむるにあり」(English Historical Review, I. 40) 經濟學を社會哲學の一部門視することに對する論理的非難は、一般人心に關する程度内に就き考ふるに、その學理により目前の事件に就き、指針を與へ得ざるの事實により助勢されたり、事情の變化あるがために、英國の貿易策を考へ直すを可とすと、なされ得べきに非すと抗議せし諸教授は (Times, 15 Aug. 1903.) 彼等により説かれし學說の、學問的性質につき不信を懷かしむるに與りて力ありと、研究上效果なく、實際の事に當りて信頼し兼ねべき取扱の仕方は、賞むべきことならず、「消費者の地代」「無形資本」と謂ふが如きは、速かに世に葬り去らるべく、夙に又經驗的學問進歩の結果かく運命づけられたる所なり。

四、第十九世紀の後半中經濟史の研究は、一新刺戟を受けたり、蓋し史的諸事情の知識は、無駄なる術學にあらずして、目前の諸問題理解の目的上肝要なること、軌近生活の複雑を究めんと企つるに當り、人開の各種經驗を引くは望ましきこと、漸次承認せらるゝに至りして以てなり、Richard Jones は英蘭の經濟發展が、他の諸國の經濟發展に比し、大に先んじたるを主張し、(Literary Remains, edited by Whitwell, p. 556) 英蘭の特別事情に照して適切なる諸原理を、全體としての

世界につきても眞理なりとして、取扱ふは誤謬たることを主張せり、氏の著 *Political Economy of Nations* (Ibid. p. 337 f.) は英國にては寧ろ功を奏せざりしも、同様なる觀點は獨逸の諸學者により採用せられ、(見解繼受に關する直接證據は、存在せりとは想はれざるも、「」が三十年代の初め歐洲にあり、英國經濟事情を特に研究してありし當時、Richard Jones の諸著書及教旨に就き、全く不案内たりしとは受取れず) 夫等學者は英蘭が何故に、産業上を迄顯著なる成功を擧げしか、その理由の研究に取掛かれり、*Lists National System of Political Economy* は實際家を促し、英國産業上の偉大が、第十八世紀中に築き上げらるゝに至りし、諸方法を考へしむるに至り、又首尾克く英國を凌駕するの可能を指摘したり、Roscher (*Zur Geschichte der englischen Volkswirtschaftslehre in Abhandlungen der phil.-hist. Classe der k. sachs. Geell. d. Wissen. II. Leipzig, 1857*) は英蘭に於ける經濟學の初期文献を周到に研究し、勞働組合に關する Brantano の論文 *Der Arbeitertagen der Gegenwart, 1871* は、社會的諸施設を究むるに當りても、諸政策研究に於けると同様、歴史を參酌するの甲斐あることを明かにせり、獨逸の諸學者は次いで英國の學說に反動を及ぼし、遠き昔しに遡りて研究するの必要は承認せられたり、Seeborn の「史的著作物は氏がその身を處し、その事繁く又活動せる生活を送りし、目前の環境に關し、解決の端緒を過去に搜すの必要を、感せし結果なり」とはその子の報する所なり、(Preface to the *Spirit of Christianity*, by F. Seeborn, p. VI.) 氏の著 *English Village Community* はそれ自體として注目すべき著書たるのみならず、新時代の人々に非常なる刺戟を與へ、目前の問題に對する關係を明かにするため、史的研究に専心せしむることゝなれり、Toynbee 及その影響を受けし人々

にとりては、歴史は社會現象の研究者により、背後に棄置かれ兼ねべき一活物なり、一の舊國に於て過去の經驗は、輒近に至り經濟學研究の一要素として承認されたり。

五、社會哲學者は萬國通用の學理を、精説することに孜孜たりし間に、英國及其の海外植民地經濟狀態の、周到なる調査に當れる活動は、絶ゆることなく又増加し行けり、政府のために企てられたる經濟調査は、特に興味ありき、多數の委員會は任命せられ、その報告は又現代に就き觀察されたる事實を夥しく含む、共同小作人 *Cotters* 委員會の報告、*Highlands* 及 *Islands* の産業に關する *Scott* 教授の報告の如き、特殊地方に於ける諸遺風の記録は、旬年を重ぬるに従ひて遂げられたる、經濟進歩に關する印度政府の調査同様、特に興味あり、一般に材料の蒐集上、經驗的經濟學に一大進歩ありき、而して夫等の材料は極めて複雑なるを以て、抽象及通論化により諸問題を省約するの要あり、その手續たる之に檢校を施すの可能あらば、茲に吾人をして限られたる時代及地積にとり、眞理とすべきものを説くことを得せしむ、未來の豫想につきては、多少の假説を提唱し、假定されたる特殊條件の下何事の起るらしきかを、その假説より演繹するの要あり、されどその諸結論は論理的に必至のとせらるゝ際にも、そは右の前提より抽出さるゝものなるを以て、實際生活上自然的に必至とすべきものを、説くと考ふべきに非ず、需用供給の法則は、一切の市場につき、又汎言せんか貨幣經濟行はるゝに至りし地方につき適切なり、されど吾人をして多少の確實性を帯びつゝ、將來に於ける事の成行を豫言せしめ、又は殘存せる現品經濟の現象を説明せしめ得べき程度迄に、絶對確實とすべきことなし。(完)